

Editorial

「エビデンスだけでは太刀打ちできない領域」と言う誤解があるでしょうか。それとも「マニュアル化できない最後の分野」と表現すればいいのか。「最期の最後のがん診療」の舞台には、そんな印象がつかまいます。

そんな印象を抱かせる原因のひとつに死の存在があることは間違いないようです。生きている限り誰も経験できない、「死」。死を経験した人間の体験レポートのひとつでもあれば随分と印象は変わるでしょうが、そんなことはあり得ません（そういえば一時期脳科学分野で盛り上がった「臨死体験」は今どうなっているのでしょうか）。絶対不可避の死へ向かいつつある人間のかたわらで一体なにができるのか。誰しもが迷い、簡単には答えを出せない問題です。

しかし、科学の進歩は、少なくとも臨床的な対応に限って言えば、こうした曖昧な印象をたやすく消し飛ばしそうな勢いがあります。鎮静や予後予測、そのほか身体症状の出現時期や対応策などは、日本を筆頭に各国で研究が進み、「なにを」「いつ」「どのようにすればよいか」ということに関しては相当数の知見が蓄積されてきています。特に、2000年代に入ってから終末期における「死」への向き合い方、付き合い方はかなり固まってきたような感覚がありますし、それら知見をバックボーンとしたマニュアルブックやレファレンスブックも多く刊行され、臨床現場で評価を得ているようです。

ただ、そのような現実がある一方、本号の特集「最期の最後のがん診療」の各論考では医療現場での苦闘、独特の難しさが繰り返し主題を変えて語られています。

その難しさには、どうも「主体と意思／意志」が関係しているように思えます。

ここ数年、「自律」と「意思決定支援」というキーワードをよく目にするようになりました。医療分野に限らず、具体的には、障害者総合支援法や成年後見制度など、社会保障の法整備に関係した言葉なので、その改正や整備が進められている最中に度々登場していたものではあります。ただ、そこで語られる意思決定支援の中身や自律の定義に対して、個人的にはなにか釈然としないものを感じていました。

「自分で自分のことを決める」というのは人間として理想的な形であり、そうなりたいと願うこと自体は至極まっとうなことです。なにより自己決定への欲望は、近代以降の人間において自然と備わっているもので、毅然と速やかに決断を下すことのできる人間が悪い印象をもたれることはほとんどありません。しか

し、本当に「自分のことを自分で決める」ことができる人間などどれほどいるのでしょうか？

最近刊行された『みんなの当事者研究』（熊谷晋一郎＝編、金剛出版）の冒頭、熊谷晋一郎氏と國分功一郎氏による対談では、次のような意見がありました。

（熊谷）『……「死」は明らかに中動態的な現象ですが、奇妙なことに「死」を自己決定しなくてはならないという論調が加速度的に進行しており、一部の現場では深刻な事態を招いています。たとえば、ALS患者や難病患者が、「リビングウィル」と呼ばれる書面に「自分で呼吸ができなくなったら、人工呼吸器はつけないでほしい」といった形で、予測的な未来に関する自己決定を書き残すことを迫られる状況を思い浮かべてみましょう。この書面に法的な拘束力と実行力をもたせようとする法案整備も進行中ですが、当事者団体のなかには根強い反対意見があり、私もそれを支持しています。『逝かない身体』（医学書院）を書かれた日本ALS協会の川口有美子さんなどの支援者や、ALSの当事者活動をされている方々がおっしゃるのは、「リビングウィルの書面を書く時点では、今まさに命が絶たれようとしているときの苦しさを予測できない」ということです。「過去の自分」が書いた「リビングウィル」の書面が法的実効力をもてば、今まさに命が絶たれようとしている「現在の自分」が、かつて「リビングウィル」の書面を書いた「過去の自分」に裏切られることになるかもしれない。意志の領域を超える「死」という現象を自己決定のカテゴリーに収めること自体に、すでに論理的な困難があるということです。』

最期の最後のがん診療とはまた違う場面、違う状況での死の意思決定に関する話ではありますが、なにか通奏低音のように響くものがあるように思えてなりません。こうした議論を踏まえて考える限り、「最期の死の瞬間の自己決定」には存在論的な困難さが既にあるようです。その存在論的な困難さをどう乗り越えていくか、その現場的な方策の一つとしてエンドオブライフディスカッションがあり、そこにいたるまでの医療者の関わり方全てが関係してくるのだと思います。

「何を」「いつ」「どのように」が解決されつつある一方、「誰が」という主体の問題がいま再びクローズアップされてきている。それが今の最期の最後のがん診療の現場なのではないでしょうか。

「Cancer Board Square」編集室 三橋